水産科学の分野で活躍する女性たち 29

Dynamic Women@Fisheries Science 29

新しい分野への一步を踏み出して

多賀（宮島）悠子

（鯉）水産総合研究センター水産工学研究所

YUKO MIYAJIMA TAGA

National Research Institute of Fisheries Engineering,
Fisheries Research Agency, Kamisu, Ibaraki, 314-0408, Japan

私は2014年3月に京都大学農学研究科フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所で博士号を取得し、4月から水産総合研究センター水産工学研究所に任期付研究員として勤務しています。専門は水産生物の行動生態学です。まだまだ駆け出しの研究者ですが、水産研究者を目指す女子学生の皆さんとは年代が近いので、研究や進路についての同じ悩みを抱えている方もいらっしゃるかもしれません。拙稿を通し、何か参考になるものがあれば幸いです。

私は学部4年から博士課程修了まで京都大学の舞鶴水産実験所に所属し、益田玲爾准教授と山下洋教授のご指導の下、生理学や行動生態学的なアプローチから「クラゲを食べる魚」について研究を行っていました。魚はなぜクラゲを食べるのか、いつから食べるか、栄養になるのか、興味の赴くままに研究できる、恵まれた環境でした。博士課程に進むことに悩まなかったのかと聞かれることがあります。先輩方の多くが博士課程に進学されていたことに加え、幸い日本学術振興会の特別研究員として採択され、金銭面での不安が少なかったこともあり、就職やその後の進路について特段深く考えることもなく進学しました。博士課程の間に結婚し、夫は仕事で遠方におりましたので、実験中は別居、論文執筆は夫のもとで、と実験所と自宅とを行き来する生活をしていました。

博士3年になると、博士号取得のめども立ち、就職の二文字が頭をかすめるようになりました。夫の理解と支えがあり、これまで別居婚でやってくることができましたが、20代も後半に入り、出産や子育てが自身の生活として現実味を帯びてくる中、別居しながらこれらのライフイベントをこなしていくことに不安を感じていました。その一方で、研究も結婚生活も理想通りに、とはなかなかいかない就職事情であることも実感していました。別居しながら妻・母として、研究者として立派に両立している方もたくさんいらっしゃいますが、自分の中での優先順位を考え、夫と同居できることを第一に、研究を続けられる仕事であることを第二の希望として、職を探すことを決めました。

しかし、現実には厳しいもので、夫と同居できる範囲に、自分の研究分野にあった研究員の募集はありませんでした。そんな中見つけたのが、水産工学研究所のテニュアトラック制任期付研究員の募集です。これまでの学生・研究生活において「工学」なんて縁遠かったですし、募集された研究課題である「水産生物の受動的音響観測のための技術開発」も自分の専門に近いとは言えないものでした。しかし、私の研究経験や技術が役立つ場面もあるだろう、と思い切って応募しました。結果として、現在の職に就くことができたわけですが、なぜ専門分野が遠い私が採用されたのか上司に伺ったところ、研究員の人数が限られている中、これまでにない専門分野の人が入ることで研究の幅が広がるのが良かった、という言葉いただきました。私はこれまで、研究分野がぴったりで即戦力になる人材ばかりが求められると思っていましたが、募集分野と専門分野が異なるからと敬遠せず、自分のこれまでの経験を役立てることができるか、ということを考えてみてもよいのかもしれない。

さて、こうして水産音響の世界に飛び込んだわけですが、これまで学んだことのない分野での1からの再スタートということで、ちゃんとやっていけるだろうかという不安でいっぱいでした。しかし、いざ働き始めてみると、新しい技術を学ぶことで研究の幅が広がり、毎日ワクワクしながらデータを取る日々を過ごしています。確かに、これまでとは異なる研究分野のことを1から学んでいくことは大変ですし、まだまだ勉強しなくてはならないことは山積みですが、「専門が違う自分だからできること」もたくさんあり、研究に手ごたえとやりがいを感じています。

水産工学研究所に就職するにあたりもう一つ不安だったのは、工学系の研究所ということで、女性研究者が少ない環境でやっていけるだろうか、ということでした。しかし実際に働き始めると、女性が働きやすい職場づくりに水産総合研究センターが力を入れていることが分かりました。例えば、私の働いている水産工学研究所では、所長と女性研究者との懇談会が開かれ、研究生活で不便していることや、子育てとの両立に向けた要望など、個々の声を直接聞いていただける機会が設けられました。そして、その懇談会の結果、トイレの無い船での調査のために目隠しテントが購入されるなど、1つ1つ職場環境の改善に向けて進んでいるように思います。子育てとの両立など、今後の生活に不安もありますが、職員の言葉に耳を傾けていただけた環境ですので、周囲の皆様に支えていただきながら、楽しく働いていけるだろうと思っています。